28 年 10 月 20 日

ところ会　10 月行事案内

バスで巡る武田勝頼終焉の地

今回は所沢市のバス費用補助事業で勝沼地方を巡ります。

記

■日　　時：平成 28 年 10 月 20 日（木）　雨天決行
■集合場所：西武池袋線 武蔵藤沢駅西口　集合時間:7 時 55 分

■見学場所及び時間：
武蔵藤沢駅(8:00)⇒入間 IC(圏央道・中央自動車道)⇒勝沼 IC
⇒天目山栖雲寺(9:55～10:45)⇒景徳院(11:00～11:50)
⇒昼食(12:05～13:25)⇒柏尾古戦場跡(13:40～13:55)
⇒大善寺(14:05～14:50) ⇒ワイナリー工場見学(14:35～15:50)
⇒帰路⇒武蔵藤沢駅(到着予定時間 17:30 頃)

■昼食：レストラン 鳥居平(トリイヴィラ)
■ワイナリー工場見学：マンズワイン勝沼ワイナリー

■武田家の終焉の歴史

平安末期に甲斐に土着して勢力を伸ばした武田家十九代（源義家の弟・義光を初代とし、三代信義が甲斐に土着）が武田信玄、その嫡男が一族最後の将 勝頼です。

天文十年（1541）、信玄は父の信虎を駿河へ追放し、武田家十九代の家督を継いだ。信玄は各地を転戦し天文二十二年（1553）には北部を除いた信濃を征服、数度に亘る川中島の戦いや駿河の今川、相模の北条との戦闘を経て勢力を拡大し、元亀ニ年（1571 年・信玄 50 歳の頃）には信濃、駿河、上野西部、遠江、三河、飛騨、越中を領有する巨大勢力を作り上げた。そして翌元亀三年 10 月、信長と不仲になった将軍足利義昭の求めに応じ、総勢３万の大軍を率いて天下統一を目指し、京に向けて進軍を開始する。

11 月に三方が原の戦いで家康軍を撃破した信玄は三河で進軍を停止した。病（結核だったとも）を得た信玄は喀血のため４月まで長篠で療養するが病状は好転せず、撤退途上の三河街道で病死した。勝頼

は信玄の遺言「３年間は自分の死を隠せ」に従って、後に居城躑躅ヶ崎東の円光院に葬った、らしい。

武田家の衰退

元亀四年（1573）に家督を継いだ勝頼は信玄以上の勢力拡大を目指して遠江の徳川領に兵を進めるが、天正三年（1575）**長篠の戦**で武田軍１万５千と織田・徳川連合軍３万５千が衝突、防御線を突破できず総崩れとなり惨敗となった。わずか数騎に守られて甲斐にもどった勝頼は宿敵上杉謙信と同盟し、北条氏政の妹を正室に迎えて領国の再建を目指したが上杉家の内紛に絡んで北条との関係も悪化する。

長篠の戦いで多くの武将を失い弱体化した武田家は天正九年 1581 年徳川の高天神城攻撃に後詰をせず、武田家の威信を大いに下げることになり、一門衆や重臣の造反が始まることとなった。

居城の**躑躅ヶ崎は防御施設がない**ため、**穴山梅雪**の勧めにより**韮崎郊外に新府城を築城**したものの、本拠を甲府から移す反発の他、膨大な軍資金を課すことになり、一門、家臣、甲府領民の支持を失った。

天正十年（1582）２月には築城に伴う負担の増大などが原因で信玄の娘婿・**木曽義昌**が織田信長に**寝返る**。討伐軍を出すと、織田・徳川軍に北条軍も加わった大群が武田領への進軍を開始した。2 月末に高遠城が落城、勝頼は１万 5 千の兵を率いて諏訪に進軍したが、韮崎にある未完成の新府城に撤退する。

・**3 月 1 日**、武田一族で甲府の留守を頼んでいた**穴山梅雪**が織田勢に寝返った。未完成の**新府城**では大軍を迎え撃てないため、軍議を開いた。**真田昌幸**は**岩櫃城**行きを勧め、一旦は岩櫃城行きを決めたが甲斐を離れがたいこと、遠路であり雪が深いことから勝頼は**小山田信茂**の意見を受け入れ、**大月の岩殿城**に籠城することに決めた。

・**3 月 3 日**、わずか 60 日余りしか住まなかった**新府城に火を放ち**、700 名余りの武士、女子供らを従え、岩殿城へ向かった。一行は、**僅か一日のうちに 35ｋｍ離れた勝沼まで逃れ**、夕方遅く武田家累代の祈願所であった**大善寺**に宿泊した。しかし、夜陰に紛れて多くの家臣が逃亡した。

勝頼の最後

・**3 月 4 日**、小山田信茂は母を人質に残し岩殿城に先発。勝頼に従う者は 200 人になったが、大善寺を発って甲州街道を東へ向い、笹子峠を越えて**大月の岩殿城**を目指した。一行は**笹子峠への登り口**「駒飼」の里に着き岩殿城からの**迎えを待った**。

・**3 月 9 日**、信茂の家来が来て勝頼に拝謁したが、その夜人質だった信茂の母親を連れて逃げた。

・3 月 10 日、信茂の謀反は明らかになり、逆に勝頼一行を銃撃してきた。後方には滝川一益の兵が迫り、逃げ場を失った勝頼一行は武田十三代当主・信満の墓があり武田家の菩提寺**天目山栖雲寺**（棲雲寺）で最後の戦いを挑もうと、栖雲寺に向かうが、織田軍に行く手を阻まれ田野まで引き返した。多勢に無勢、最早これまでと覚悟した勝頼は嫡男武田信勝に家督を譲る儀式を行う。武田勝頼、その夫人と信勝他 50 名の将兵がここに自刃し甲斐武田家は滅亡した。徳川家康は、武田氏滅亡の後、甲斐の国に入国し『田野寺』を建立し、自刃した勝頼とその家臣一同を弔った、それが現在の**景徳院**である。

■散策先簡単ガイド

＜勝頼最後の戦場＞

「鳥井畑古戦場」

鳥居畑古戦場の碑

・3 月 11 日、田野の鳥井畑に陣を張った。景徳院から 200m程下った所に**鳥居畑古戦場**の石碑が立っている、ここは高遠城と共に甲斐における２大激戦地のひとつで、甲斐武田家終焉の地でもある。勝頼は 37 歳、正室の北条夫人は 19 歳、嫡子信勝は 16 歳、500 年近く続いた武田家の正統はここで途絶えた。

四郎作古戦場の碑

ここから更に 100m 程下流には**四郎作**（つくり）**古戦場の碑**がある。蟄居幽閉を命じられていた小宮山友晴は前夜、主君の窮地に馳せ参じた。小宮山友晴は四郎作に陣を張り、僅か数人で、織田勢の滝川一益、河尻秀隆ら 4000 と戦った。

またここから 2km 上流方向、栖雲寺に向かう道では武田家武将 土屋惣蔵昌恒が天目山方面の敵を防ぐため、崖道の狭い場所で岩角に身を隠し、片手は藤蔓につかまり、片手だけで敵兵を次々に切っては谷川に蹴落とし、勝頼一行が田野まで戻り自刃することが出来た、という逸話が残っていて、**土屋惣蔵片手斬遺跡**の石碑が立っている。

土屋惣蔵片手斬遺跡の碑

なお、土屋昌恒の遺児は秀忠の小姓として召し抱えられ、その後上総久留里藩 21,000 石の大名となった。逆に、大月岩殿城の 小山田信茂は、勝頼の死後織田軍に投降したが、騙し討ちのような裏切り方を咎められ、織田信忠によ

り処断されている。

＜栖雲寺＞　（拝観料 500 円）

栖雲寺（せいうんじ・棲雲寺）は、甲州市大和町木賊（とくさ）にある寺院。**臨済宗建長寺派で、天目山栖雲寺、本尊は釈迦如来。**

南北朝時代の貞和 4 年（1348 年）**業海本浄**（ごっかいほんじょう）を開山として創建されました。**開基は甲斐国主の武田信満公で、武田家の菩提寺**として大いに繁栄しました。勝頼公の敗北後は、織田家の兵火で殿堂を焼失しましたが、徳川家康が寺領を寄付した為に旧観を取り戻しました。武田家の滅亡によって外護者を失いましたが、江戸時代には建長寺末山の四大柱寺の一つとして特別の待遇を受けていたようで、衰えたりといえども巨刹の面目を存していた事がわかります。また**国指定重要文化財の普応国師坐像**をはじめ、多くの文化財を有する寺院でもあります。**県指定史跡の石庭**は当時多くの修行僧が坐禅を組んだ禅庭として伝わり、秋には見事な紅葉が見られます。

業海本浄(ごっかいほんじょう)

開山の業海本浄は文保 2 年（1318 年）元に渡って**杭州の天目山**に登り、**中峰明本（普応国師）**に参じた 6 人僧の一人で、印可を授かって嘉暦元年（1326 年）に帰国しました。その後、山水を愛して諸方を行脚し、この山が杭州の天目山によく似た景勝の地であったことから、天目山護国禅寺（現在の栖雲寺）を創建しました。業海は出世の意を懐かず、また当時一世を風靡していた夢窓疎石の一派にも染まらず、俗世間から遠く離れたこの栖雲寺の境内で、樹下や石上で坐禅を組み中峰の教えを伝えました。文和元年（1352 年）7 月 27 日示寂。

普応国師（中峰明本）　（ちゅうほうみんぽん）

中国の元代の禅僧で、杭州西天目山の高峰原妙について出家、参禅。師の死後 34 歳で天目山を去った中峰は山林江湖を移り行き、行く先々で庵を作ってはそこを幻住庵と呼び、定居なく「幻人」として

生涯修行されました。西天目山に戻っても住寺要請は止まず、時には舟上に居を構え、ただひたすらに静かな場所での修行を求めた禅僧の中の禅僧です。61 歳で示寂、11 年後の建武元年（1334 年）に普応国師と諡されました。西天目山の幻住庵には名声を聞いた日本の僧侶も多くの者が参禅しました。栖雲寺開山業海本浄もそのうちの一人です。

文化財

国重文**「普応国師坐像」**、県有形文化財**「業海本浄坐像」「釈迦如来坐像」**などの他、**信玄公の軍配**、武田勝頼が田野で自刃した際の遺品と言い伝えられる、武田の赤い**軍旗**等がある。

石庭

庫裏東側の急斜面に広がる県指定名勝の庭園。禅寺の庭園と聞いて想像する様な鎌倉や京都の庭とは全く異なり、多くの巨岩からなる豪快な自然の造形です。創建当時、修行僧達は石の上や樹の下で坐禅を組み、業海が庭園上段にある「坐禅石」の上に坐って弟子たちの坐禅の様子を検単（チェックすること）していました。坐禅をする為の庭すなわち「禅庭」として業海本浄が作庭されたものです。庭園の中には**地蔵菩薩と文殊菩薩の磨崖仏**があります。山梨県では唯一の磨崖仏で、いずれも**県指定文化財**です。庭園には順路があり、**坐禅石、三尊石、摩利支天堂、磨崖仏**などを廻れます。秋には庭園のみならず、周囲の山々まで見渡す限りの紅葉がみられます。

摩利支天(まりしてん)

摩利支天は仏教の守護神で、語源はサンスクリット語のＭａｒｉｃｉ（マーリーチー）陽炎を意味します。陽炎は実体がなく目にも見えないので、捕らわれず、傷つかず、財を取られることがありません。摩利支天は猪に乗って素早く移動し、いろいろな災難から私達の身を隠しご守護くださいます。また害されることがないことから、死と隣り合わせで戦う武士の間にも敵から身を隠し勝利へ導く**戦場での守護神として信仰**されました。信玄の家臣山本勘助や、前田利家、楠木正成なども小像を身につけて出陣したと言われております。禅宗寺院では、本

尊と別に鎮守をお祀り致します。栖雲寺では釈迦如来を本尊、摩利支天を鎮守としてお祀りしています。

蕎麦切り発祥の地

蕎麦は初め、実を粉にして食べるそばがき、そば餅として食べられており、今の様な細く切って茹でた蕎麦（蕎麦切り）はありませんでした。蕎麦切り発祥の地は、ここ天目山栖雲寺です。尾張藩士で国学者の天野信景が江戸の元禄年間に出した雑録「塩尻」の宝永年間の条で『蕎麦切りは甲州よりはじまる。初め天目山参詣多かりし時、所民参詣の諸人に食を売るに米麦の少なかりし故、そばをねりて旅籠とせしに、其後うどんを学びて今のそば切りとはなりし、と信濃人のかたりし』と記述されています。栖雲寺のある木賊地区は現在でもそうですが米は採れません。当時も米麦は少なかった為に、うどんに学んで蕎麦切りを作って参拝の方々に食べさせていたのでしょう。

＜景徳院＞

徳川家康は、武田氏滅亡の後、甲斐の国に入国し『田野寺』を建立し、自刃した勝頼とその家臣一同を弔った。のちに勝頼の戒名である**景徳院**に改めた。**景徳院**は曹洞宗の寺院で、 本尊は釈迦如来、山号は天童山。

歴史

天正 10 年（1583 年）3 月、武田氏は滅亡した。同年 6 月、甲斐は三河国の徳川家康が領する。武田遺臣の一部は家康に臣従し、同年 7 月に勝頼と家臣ら殉死者の菩提を弔うため、田野郷一円を寺領として寄進し、景徳院を創建した。

広厳院（笛吹市）から武田家臣・小宮山内膳の弟である 7 世拈橋（ねんきょう）を招き、天正 16 年（1589 年）には伽藍が完成した。家康はこの他にも武田遺臣を保護しているが、無主となり緊張状態にあった甲斐国における領民懐柔政策でもあったとも指摘される。

江戸時代には住職不在状態となり衰退し、寛永年間（1624 年～1644 年）に広厳院から住職が招かれ再興されているが、旧武田氏家臣の幕臣の要求により、下総総寧寺の末寺とされたという。

天保年間（1830 年～1844 年）には火災が生じて主要伽藍を焼失し、

弘化年間（1844 年～1848 年）や明治時代にも火災が生じている。最古の建物は安永八年（1779）再建の**山門**である。

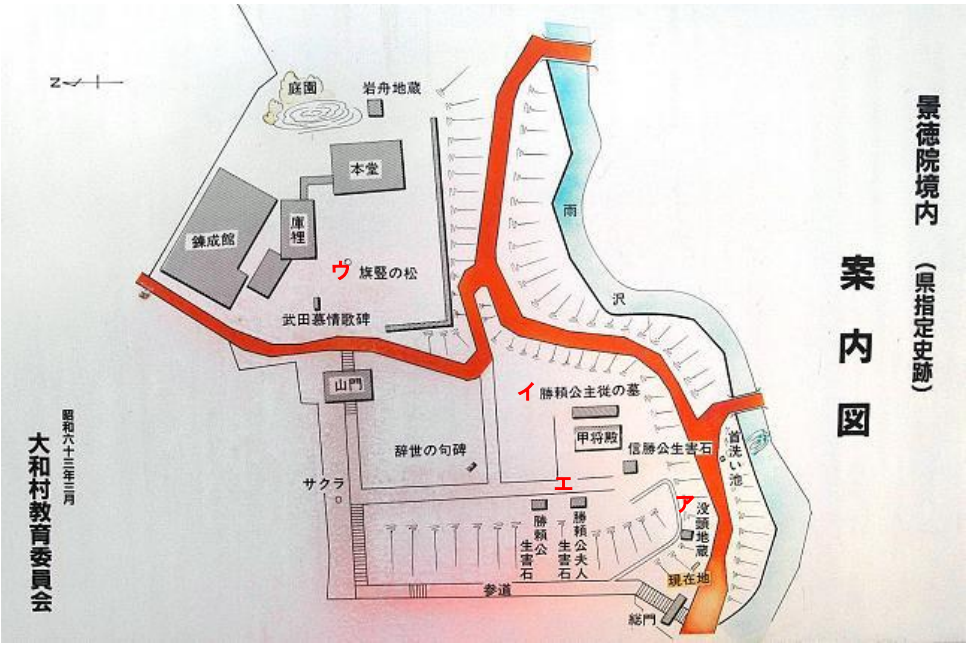
文化財

火災から類焼を逃れた**山門が県指定有形文化財、境内及び武田勝頼墓が県指定史跡**となっているほか、**境内の桜が甲州市の天然記念物**に指定されている。

姫ケ淵

北条夫人（北条氏政の妹）に従った侍女 16 名は日川の淵に身を投げ殉死したと伝わり、後にこの地を姫ヶ淵と言い伝えるようになりました。

景徳院の駐車場には夫人を含めた 17 名を慰霊する大きな石碑があります。



没頭地蔵尊（ア）

首無地蔵とも呼ばれ、首級をとられ首のなかった勝頼、北条夫人、信勝ら 3 人の遺骸を村人がここに葬ったと伝わります。傍らには 3 人の辞世の句が彫られた石碑が建てられています。

勝頼（享年 37 歳）辞世の句
おぼろなる月もほのかに　雲かすみ
はれてゆくえの　西の山の端

北条夫人（享年 19 歳）辞世の句
黒髪のみだれたる世ぞ　はてしなき
思ひに消ゆる　露の玉の緒

信勝（享年 16 歳）辞世の句
あだに見よ　誰も嵐の桜花
咲き散るほどの　春の夜の夢

勝頼の墓（イ）

勝頼の墓は、甲将殿の裏手にある。宝篋印塔の銘文によれば二百周忌にあたる江戸時代の安永 4 年（1775 年）に 11 世住職により造立された供養塔で、勝頼を中心に信勝と北条夫人のものが両脇に配されている。

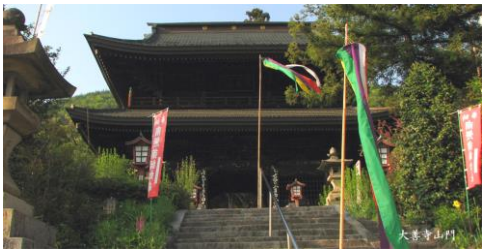
旗竪の松（ウ）

世子信勝に「環甲」の例を行ったとされる。この松に武田家の重宝「御旗」を立て、信勝に「楯無の鎧」を着させ、甲斐源氏武田家の跡取りであることを示す儀式を行ったのである。

生害石（エ）

勝頼、夫人、信勝が自害したと伝えられる石。

＜大善寺＞　（拝観料 500 円）



養老二年（718 年）僧行基が甲斐の国を訪れたとき、勝沼の柏尾にさしかかり、日川の渓谷の大石の上で修行したところ、満願の日、夢の中に、手に葡萄を持った薬師如来が現れました。

行基はその夢を喜び、早速夢の中に現れたお姿と同じ薬師如来像を刻んで安置したのが、今日の柏尾山大善寺です。

以来、行基は薬園をつくって民衆を救い、法薬の葡萄の作り方を村人に教えたので、この地に葡萄が 栽培されるようになり、これが甲州葡萄の始まりだと 伝えられています。

国宝 薬師堂

本堂の中に、**薬師三尊像**を安置していますので「薬師堂」とも呼ばれます。この薬師堂には、弘安9年3月16日（1286年）の刻銘があり、元寇（弘安の役）の数年後に建てられ、築730年以上にもなり山梨県では一番古い建物です。

内部は内陣下陣に分かれ、内陣には須弥壇を設けて**厨子**（国宝）を置き、**薬師如来**をお祀りしており、その両側には**日光菩薩**、**月光菩薩**、更に**十二神将**を配しています。

薬師如来、日光・月光菩薩、十二神将は国重文です。薬師堂の中に入って拝観でき、説明もあります。

武田勝頼と大善寺

勝頼が韮崎の新府城を出発し、この柏尾山大善寺で戦勝を祈願して、薬師堂に勝頼、勝頼夫人、武田信勝を迎えて**理慶尼**と4名で寝所を供に一夜を明かしました。しかし、武田家再興がかなわないと見た家臣の大半は夜半に離散しました。

勝頼主従は天目山を目指しましたが、織田・徳川の連合軍に行く手を阻まれ、ついに三月十一日、勝頼以下一族と家臣は自決し、新羅三郎義光以来五百年続いた甲斐源氏は滅亡しました。

その一部始終を目撃した理慶尼が記した**理慶尼記**は、また**武田滅亡記**ともいわれ、尼の住んでいたこの大善寺に今なお大切に保管されています。

理慶尼の俗名は松葉、勝沼信友（武田信虎の弟）の娘で雨宮家に嫁した、信玄の従妹にあたる。北条氏綱と戦った信友の戦死により跡を継いだ信元は上杉との内通により信玄に滅ぼされ、勝沼家は絶えた。疑われるのを恐れた雨宮家を離縁された松葉は近くの大善寺で剃髪し、理慶尼を名乗った。実家の勝沼家を滅ぼし、兄を殺した信玄の子が勝頼だったが、危険を承知で敗残の一行を労わった。一説に、一時期の彼女は勝頼の乳母を務めたともされています。

勝頼を最後まで裏切ることなく守り、戦死した家臣の子供たちは、後に徳川家康に重用され、江戸時代には各地の城主に任命されました。勝頼の「宿」となった薬師堂にはその子供たちから寄進された**文殊菩薩**、**毘沙門天**が今でも大切に安置されています。

＜柏尾古戦場跡＞

柏尾橋のたもとには近藤勇の像が立っています。柏尾橋は**近藤勇**率いる**甲陽鎮撫隊**が新政府軍と戦った場所です。橋のそばに小さな公園がありその様子を説明しています。

旧幕府軍は鳥羽・伏見の戦いに敗れ、大坂から江戸へ帰還しました。その後、近藤勇を隊長とする甲陽鎮撫隊は新政府軍の東進を阻止するため、甲府城の入城を命ぜられます。しかし、**板垣退助**率いる 3000 の新政府軍はわずか一日の差で甲府城に入城しました。

近藤は援軍要請のため土方歳三を江戸へ向かわせる一方、自身は西進し 3 月 5 日勝沼に布陣。**大善寺**に本陣を置こうとしたが、大善寺には徳川家縁の寺宝があるという理由から諦め、大善寺の西側に先頭、山門前及び、東側の白山平にいたるまで細長く配置されたとされています。当初 300 名いた隊員は次々と脱走し、このときわずか 121 名だったといわれています。

戦闘は 3 月 6 日正午頃から始まりましたが、わずか 2 時間程で甲陽鎮撫隊は江戸へ敗走することになりました。

以上